

2022 年度 (令和 4 年度) 学校評価自己評価表

向丘中学校区	校番 20	福山市立水呑小学校
最終更新日		2023年(令和5年)2月20日

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	主体性
<ul style="list-style-type: none"> 校区共通の指標を設定し、実態や成果課題を整理しており、校区の取組が良く分かった。 学び合い学習等により、自分の考えを深めたり広げたりできる児童生徒が増えている。 教職員研修や地域とのかかわりは概ね良好である。 不登校児童・生徒への取組を推進する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 指示されたことはやろうとするが、主体的な動きにはなっていない。 自己肯定感や自己有用感が低い児童生徒がいる。 粘り強く取り組む事が苦手な児童生徒がいる。 様々な状況により、不登校になっている児童生徒がいる。 	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	<p>人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子ども</p> <p>○子ども主体の学びに向けた授業づくりを推進する。 ○自分で考え、判断し、決断して行動できる教育活動を創造する。 ○不登校ゼロへの取組を推進する。</p>
		中学校区として統一した取組等	

III 自校

ミッション	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	主体性
自分で考え、判断し、決断して、行動できる子の育成 ～探求する授業づくり・自治できる学校づくり～	自己理解 (21世紀型“スキル&倫理観”)	自己理解：自分の得意なこと、興味・関心のあること等自分自身について理解し、対話できる。 自治力：自分たちで意志決定し、行動し、その評価を自ら行い、次の活動につなげる。
学校教育目標	めざす子ども像	自己理解
自ら学び 心豊かで たくましい 水呑っ子の育成	1,2年	自分の得意不得手や考えの変容に気づき、自分のよさを伸ばそうとする。
	3,4年	自分の得意不得手や考えの変容、新たに学んだ価値観に気づき、自分を成長させようとしている。
	5,6年	自分の得意不得手や考えの変容に気付くと共に、よりよい生き方について考えを深め、自分を成長させようとしている。
現 状	研究	自治力
<p>子どもの姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子ども同士で対話をする場面が多く見られた。 ○「学びファイル」の振り返りを通じて、「できることが増えた」と感じる児童が増えた。 ○自主学習の内容が自分の得意不得意に応じた内容になってきている。 ●高学年では、すぐに「答え」を求める姿や分かる人の説明を待つ姿がある。 <p>授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ○失敗することに対する意識が変わってきた。失敗を責めたり、恥ずかしいと思ったりする児童が減ってきた。 ●減っては来たが、発表に苦手意識をもつ児童がいる。 ●授業に向かう児童は増えたが、深い学びや学力向上につながらない場面がある。 	教科等 国語科・外国語活動・英語	<p>友だちの思いや気持ちを聴き、想像しようとすることができる。</p> <p>自分の意見や考えをもち、人の考えと比べ折り合いをつけ、よりよいものにしようすることができる。</p> <p>誰もが大切にされているかという視点に立ち、自分たちで考え、学校全体のことをよりよくしようすることができる。</p>
	主題・内容等	
	めざす授業の姿	
	自分で決め、挑み続ける水呑っ子の育成 season2 ～認知の仕組みを生かした場づくりを通して～	
	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの実態や認知の仕組みから子どもの学び方を見取る。 ・子どもの「もっと知りたい」「もっとこうなりたい」が生まれる、つながる。 ・子どもの思考の流れに沿う。 ・子どもの多様な学びを保障する。 ・子どもの学びが深まっていく。子どもも教職員も「わくわく」「楽しむ」! ・対話や振り返りを通して、気付く、深まる。 ・教えるところはしっかり「教える」。 	
	生きた学力につながる!	

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標 ●は中学校区共通	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							指標に係る取組状況	達成評価	改善方策	指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	達成評価	総合評価	改善方策		
4	子どもが主体となる授業づくり	★	継続	1 自分で決め、学びに向かってチャレンジし続ける授業づくり。	①視点を明確にした振り返りの場を保障する。 ②多様な学びが選べる環境づくり ③子どもも先生も教科や単元のおもしろさを実感できる教材研究	●児童アンケート「授業で考えることはおもしろい」の肯定的評価を85%以上にする。	□児童アンケートの結果は81.7%であった。 □一方的な教え込みではなく、「認知の仕組み」に即した授業づくりに取り組んでいる。	3	3	□日々授業を互いに見合うことで、児童の姿をもとに教材研究をしたり、児童らが自ら学び始めるために必要な要素について、職員間で議論したりしていく。	□児童アンケートの結果は80.8%であった。 □互いに日々の授業の実践を見合い、気づきを発信・交流することで、授業者も学び合いながら実践している。	3	3	3	□年度当初に教員一人一人が設定した研究テーマについて、成果と課題を分析し、交流し合い、児童にとって学びがおもしろいとはどういうことかについて、問い直しを行う。
4	1 安心して通える学校づくり		継続	1 個に応じて指導し、自己決定の場を設ける。	①新たな不登校をゼロにする。 ②自己決定の場を作り、児童会活動を充実させる。	●新たな不登校をゼロにする。	□昨年度の同時期と比べ、長期欠席児童は6人から7人へと増えている。(けがによる入院を含む) □不登校傾向になりそうな児童の早期発見に力を入れていた。	3	2	□タブレットを利用し、不登校傾向の児童に対しても学校との関係がつかがっているようにする。 □放課後や朝の時間等、少しでも学校に足を運んでもらうように保護者と密に連携する。	□1月末現在で、新たな不登校児童は4名だった。不登校児童が少しでも学校に登校できるよう自己決定する中で時間を工夫し放課後に登校したり、タブレットを活用したりして欠席が長期化しないように力を入れていた。	3	2	3	□こまめな電話連絡や必要に応じて家庭訪問を行い、児童と方向性を定めたり今後の目標を決めたりする。
2	「自分の命を守ること」について主体的に考える子を育成する		継続	1 避難訓練を通して、自分で考え、判断し、行動できる子を増やす。	①予告なしの避難訓練の実施 ②避難訓練の振り返りシートを作成し、自らの避難の仕方について考えさせる。	○児童アンケート「先生の指示を聞いたり、自分で考えたりして、「避難のきまり」(あおはしも)に気を付けて安全に避難することができた。」肯定評価80%以上にする。(避難訓練実施後のアンケートより)	□児童アンケートの結果は88.7%であった。 □感染症対策のため、予定通りの避難訓練を実施することができず、自分で考えて避難をする機会が少なかった。	3	4	□コロナ禍でも、自分の命を守るためにはどうすれば良いの自分で考え行動できる訓練になるよう内容を工夫していく。	□児童アンケートの結果は93%であった。 □事前指導や事後指導等で映像を見せたり様々なVターンを設定して話をしたりすることで、災害が起こった時にどうすれば良いのかを考えさせた。 □予告なしの避難訓練を1年以上できていないため、これまでの避難訓練で考えたことが実際に行動に移せるのが不安である。	3	4	3	□振り返りシートに避難経路図を載せたり、振り返りの視点を与えたりする等、内容を工夫する。
3	教職員の働き方改革を推進する。		継続	1 学校における組織マネジメントを確立し、業務改善・業務削減を推進する。	①毎日入退校記録を確実にを行い、超過勤務時間が4.5時間以内になるように自己管理する。 ②業務の運営を全体で改善する。	●超過勤務時間月4.5時間以内の職員を95%以上にする。(学期ごとに算出)	□1学期93.8%であった。 □コロナ休みによる対応等、予定通りにいかない場合も多い。	3	3	□引き続き情報機器を駆使して、職員の負担軽減・児童の学びの質の担保を図る。	□45時間以内の職員は96.1%。また、時間外在校時間の平均は30時間28分であった。	4	4	4	□定期的に業務が偏ることもあるが、職員一人一人が見通しを持って業務にあたり、退勤時間を意識したりすることが定着した。 □日頃から家庭との連携を図ることで、突発的な対応を減らすことができる。

[プロセス評価の評価基準]

[達成評価の評価基準]

[総合評価の評価基準]

評価点	評価基準	評価点	評価基準	評価点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。